

戦中戦後知識人の担った使命と役割(3)

CHOI, Seonho / 崔, 先鎬

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / 法学志林

(巻 / Volume)

106

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

151

(終了ページ / End Page)

166

(発行年 / Year)

2009-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006442>

戦中戦後知識人の担った使命と役割 (三)

崔 先 鎬

1 近代知識人における中庸 (moderation) と平和——新渡戸稲造

ここで時代を少し遡って考察を続けたい。明治期に「武士道」を日本の魂として海外に伝え、国際連盟事務局次長をも経験した国際人、新渡戸稲造（一八六二—一九三三年）を取り上げることとする。新渡戸は近年人口に膾炙するところとなったが、教育者としても多様な業績を伴って幅広い活躍をした近代日本の代表的知識人であった。一般論として、真の知識人とは、専門的知識を要する学問分野で深い学識を持ち、自己を取り巻く政治的状況や現実の障害にとらわれることなく、多様な領域の学問世界を自由に往来し、時代の歴史的視野を押し広げることができる批判的知性を有する存在であるが、その中でもとりわけ新渡戸稲造は、新時代の知識人に必要とされた国際性を具備していた点で特筆に価する人物だといえるだろう。

戦中戦後知識人の担った使命と役割 (三) (崔)

新渡戸は、近代日本のキリスト教知識人の代表格である内村鑑三・南原繁ら知識人の思想形成において大きな影響を与えたであろうと同時に、彼らの根本的な精神世界を構成していた信仰の形成、並びに永久平和思想にも大きな役割を果たした。札幌農学校、第一高等学校での彼は、人格 (character) を重視する教育方針のもとに、人間内部の人格 (individuality) に対する関心、東洋と西洋を横断する偏向することのない知識、そして望むらくは信仰を通じて温かい眼差しによって支えられた個人、果ては人類に対する洞察力と理解力を得ることに積極的に取り組んだと思われる。既に取り上げた彼らは、いずれもその若き時代を明治以降の西洋化と近代化の最初の激動の中で生き抜いた世代であり、西洋を圧倒的な外部からのしかかる重さとして意識しながら、西洋を身につけることを課題とせざるを得なかったと考えられる。彼らは自らの学問世界を通して、普遍性 (universality) と固有性 (characteristics)、そして世界主義 (cosmopolitanism) と伝統主義 (conventionalism) との間の葛藤 (conflict) に対する調和 (unity) を試みたと言えよう。

このなかで、新渡戸稲造の場合、内村鑑三における強烈な信仰的信念、並びに南原繁における文化的固有性の強調の思想と比較すると、そこにはキリスト教という世界宗教の普遍性になぞらえたかの如く、俯瞰的視座を内包した大いなる中庸 (great moderation) とも呼ぶべきものが散見する。そのような彼の行き着いた到達点にさらに慈愛 (charity)、寛容 (generosity) を精神的に汲み取ることによって、自らの人生を切り開き、生き抜いてきた知識人思想家であったと思われる。新渡戸は、札幌農学校を卒業した後、若き時代において「太平洋の架け橋」となることを決意し、公費ではなく家族が捻出した費用で渡米する。七年間にわたるアメリカ留学時代 (明治一七年 (一八八四年) — 明治二四年 (一八九一年)) を経て、若年ながらも知識人として多様な活躍と業績を積み重ねることにより、

現実において自らの思想的信念を実践して行こうとした。彼は札幌農学校の教官時代(明治三四年(一八九一年)―明治三〇年(一八九七年))と第一高等学校の校長時代(明治三九年(一九〇六年)―大正二年(一九一三年))においては、若者たちに向けて啓蒙的な内容の論説を書いていた。多くは自らの経験に基づいた自然観と人生論をテーマとしていたが、特に日清戦争以降の時代(明治二八年(一八九五年)以降)にかけては、国際的利害関係の中における愛国心の問題、そして平和の問題について積極的に論説を展開したのである。この時期に書かれた著作の一つである“Thoughts and Essays”(明治四〇年、一九〇七年)は、彼の英文評論の中期の著作にあたるものであり、当時の時代状況を明示的に提起するとともに、彼自身が当時の知的な青年読者層に向かって主張しようとしていた思想的・信仰的な中庸性(moderation)の特質について探ることを眼目として、当初より標榜していたと考えられる。

2 平和思想をめぐる認識の差、そして信仰的信念

一方、内村鑑三の場合も、学生時代に新渡戸の多様な著作から大きな影響を受けた知的青年読者層の一人であり、若き時代の友であったが、日露戦争開戦前から展開した自説である激しい非戦論の立場からは後退し、控え目な立場を示すようになったことはこのような中庸性に対する理解によるものだったと考えられるかもしれない。以降の内村は同時に平和主義を観念的には捉えることなく、「平和主義とは言ふまでもなく戦はないといふこと計りではありません。前にも述べました通り非戦は僅かに其の積極的一面であります。平和主義の積極的反面は殖産であります。家庭の幸福、山林の栽培、鳥類の保護、河川の利用、土壌の増肥等、其他、総て平民の生涯を幸福ならしむことであり

ます。斯かる事業を目的とする平和主義者が国に害があるとか、用が無いとか言はるべき筈はありません。主戦論者の言ふ如を聞きますれば戦争の目的は平和にあるとのことでありませう。私共は勿論斯かる背理は信じませんが、然し彼等の言に照らして見ましても私共平和主義者が国の根本であつて、軍人は僅かに其外壁丈けであることは分かりませう」と述べつつ、具体的に例示することも忘れなかつたのである。このように、内村は自らの平和主義が「積極的反面は殖産」であり、「総て平民の生涯を幸福ならしむこと」だと主張するにあたり、同じく札幌農学校で学んだ友人の新渡戸の中庸的思想傾向を想起し適用したものとと思われる。

内村が「戦時に於ける非戦主義者の態度」を出版した時期と同時期に、新渡戸は論文「Prepare in Peace for War and in War for Peace」(平時に戦時を備え、戦時に平和を用意せよ)を発表した。この時点では日露戦争終戦から僅かの時間が経過していたのだが、主戦場は既に朝鮮だけに止まらず、満洲にまで拡大し、さらなる權益拡張の時代に入ろうとしていた時期であつた。しかしながら、日本人は西洋の大国に対する勝利そのものに欣喜し、国民としての自信を深めつつあつた。この時の新渡戸は自らの平和論を展開して、日露戦争終戦後の将来に備えるよう強く呼びかけ、自戒を促している。彼は、まず平和の意味について「平時に戦争を思い出すのより、戦時の危機の中の平和を覚えてゐる事の方が、はるかに難しい。平和が、我々にとって理想的な状態であることに疑いはないが、戦争は目的ではなく、平和に至る一つの手段であり、一つの道である。国家的、個人的生活の過程では、平和の状態が原則であり、戦争は例外である。平和は正常な生存の条件であり、戦争はそのような条件を確実にするための一時的な手段である。若者は、しかしながら、戦争の瞬間的な興奮の中で、平和のより永続的な重要性を忘れがちである」といみじくも述べたのであつた。そして、この論説の後半において彼は、「私は、我が国の若者に訴えたい：君たちの溢れる

活力を現在の戦争よりさらにもっと栄光ある戦争のために貯えておきなさい。君たちの精神を来るべき戦いのための戦略で満たし、紙上の偽物の戦闘ではないもので鍛えなさい。自らをあらゆる十分な量の知識と科学で強化し、君たちの精神の全ての機能を鋭く磨き、それらがいざという時期に曇るようなことがないように気をつけなさい。こうしたことをやって、はじめて諸君は近い将来に諸君と諸君の祖国に何か起こって来ようとも自らを十分に活用することができるのである」と具体的に正確な判断力を備える必要性を強調すると共に、厳しい現実を克服し、戦後の世界への建設的な準備のため自分自身を磨くことの必要性について、冷静な論調で述べ続けた。確かに、新渡戸と内村の平和に対する見方は、既に日露戦争の嵐が吹きはじめた頃の同時代の時点で、『万朝報』に依っていち早く非戦主義を掲げながら平和主義者の路線を目指していた内村に比べ、官職に勤めていた新渡戸の平和に対する見方は、対照的な性格による認識の差を示すものであったと思われる。新渡戸は、内村とはキリスト教を基礎とする同様の信仰的信念を持っていたものの、その職業に付随する政治的立場の差異によって、相異なる視座を取らざるを得なかったであろう。彼は、自らの信仰的信念について、現実の思想世界に反映すべきであると次のような視座をもって理解していた。

Leave me to my religion : disturb me not. Leave my religion to me : take it not away. My soul and religion are one. Keep yours for yourself as your own. Does yours face the sunrise and mine the sunset, does mine look up and yours down, what matters that? Yonder is the peak, the summit, our goal. We shall each pursue his separate path. Anon we shall meet again to clasp hands in mutual fellowship.⁽²⁾

戦中戦後知識人の担った使命と役割(三)(三)(佳)

私を私自身の宗教に委ねて、妨げないでほしい。私自身の宗教世界に関しては私にまかせてくれることを望む。私自身の靈魂と私自らの信仰は一体である。皆も自分自身のための信仰をもつようになってほしい。例え、皆が日出に向かい、例え、私だけが日没に向かおうとも、そしてまた、私のものが隆盛したり、皆のものが凋落したとしても、それがどのような意味を持つのであろうか？

我々が向かうべき方向とは、峰であり、頂点であり、すなわち我々の目標である。我々は、お互いに個々の道を目指すものである。そして我々は、程なく再会し、お互いの絆で確実に結ばれるのである。³⁾

このように、信仰的な現実 (the real) と理想 (ideals) との関係においても新渡戸は、現実の中に理想があること、そしてまた人格 (character) の中に人間の生涯 (career) が散在していることについて気づいていたのである。彼は早くから、信仰とはあくまでも個人の自由だが、善教なりと信ずるゆえに関係の深い者にキリスト教入信を是非すすめたい旨を述べ、重ねて「十字架に行き、聖書を少々求め読むこと」⁴⁾を勧めていた。新渡戸は「キリストは制度を作らなかつたが、キリスト教信者はそれを沢山作り、また作らざるを得なかつた。キリストが生きている間、彼は頭であつたが、彼の肉体が存在しない現在、教会は遠犯に悩んでいる。ぼく自身、窮屈で堅苦しい宗教上の制度は嫌いであつて、この一九世紀に必要なだけの制度にとどめ、昔の原始的なやり方に戻りたいのである。ぼくは初期のキリスト教信者の慣習からでき上がった、しかも、(それが) われわれの国家観念を正しく遵奉するような制度であらうと思う。われわれは、ただに日本のキリスト教信徒であるばかりでなく、キリスト教を信ずる日本人でなけ

ればならない。人間の本性は万人共通である。そして教会——国家もまた、そのように言えるのではあるまいか——は世界統一体になる傾向にある。しかし、それを達成するには、なお、長い歳月を要することであろう。その間われわれは人類共通の教会に加え、われわれ独自の国民性を発展させなければならぬ」と述べた。ここに彼の「人類共通の教会」を指す平和主義的信仰心があると同時に、国際主義 (internationalism) を志向していた新渡戸の行動基盤があったのではないかと考えられる。

青年時代の新渡戸と内村は、キリスト教の内容に賛成と不賛成の二派に分かれて論じ合う形式の集会、所謂デイベートを通じて付き合ったことがあるが、内村によると、新渡戸はその時「学者型のパウロは、自分でも答えられないような疑問を心に持っている。そして今彼は神経質な頭脳が作り得るもっとも手ごわい疑問をそそぎ出す絶好の機会をつかんだのだ。『この宇宙が創造されたものであること、神は全知全能であること、この神には能わざることのないことは僕も認める。しかしこの神がこの宇宙を創造し、みずから賦与したエネルギーによって、それ自体で成長し発展し得るように宇宙を動き出させたあとで——この創造主が彼自身の存在に終止符を打って己れ自信を抹殺しなかつたことを、どうして君は証明するか。もし神は全てをなし得るとならばなぜ自身を抹殺し得ないのか——』複雑な冒瀆に近い質問ではある——」と語り、「日々自ら問ひ答えつつあった内的問題ははしなくも激しい表現で疑問提出となり、果ては物別れとなる状況が目に見えるようになった」と述べている。新渡戸のこの冗談のような言葉の内容に、現実 (the real) の中に内在する理想 (ideals) との関係、かつ人格 (character) の中に人間の生涯 (career) が散在していることに対する認識があったのではないだろうか。いずれにしても、新渡戸と内村の両方とも、信仰的信念を有する者と、そうではない者の間の個人の一生涯における精神性の「自由」の範囲とが、現実と未来に

おいてやがて大きな懸隔として現れるものと判断していたのであろう。

3 新渡戸思想に内在する東西文化の体系と論理性

まず、新渡戸の実践的学問の態度を決定した要素とは、人間生活の改善と向上のために活用されるべき信念として理解することができるであろう。これは、武士階層の家門の継承者として、世俗的禁欲の態度が既に根強く培われていた彼の生活様式に起因していると考えられる。このような背景と態度がキリスト教への入信をより加速化する原因として作用し、より多くの旧支配階層が信仰の世界に参加すると共に、現実の世界における真理を求めて各分野の活動に専念することを望み、同様の信念を有する仲間たちによる参加型の社会を目指していたのである。新渡戸における実学的な人格主義と実践的倫理観は、相互に保たれたバランスを維持しつつ、近代以降の日本の学問活動と思想体系における一つの大きな目標として徐々に優勢となつて行つたものと思われる。

新渡戸は、第一次世界大戦後のアメリカが世界に頭角を現してくる過程を見守つた。大正元年（一九一二年）にはカーネギー財団（The Andrew Carnegie corp.）の後援で日米交換教授となつてゐるが、その当時に講演を行つたイリノイ州（Illinois）など、中西部において急成長を遂げていた産業の発展は確かに彼の目を引いた。既に以前から、アメリカが世界の産業と商業をリードすることにならうと予測していた彼は、このようなアメリカの産業の発展と影響力の拡張の過程に驚かなかつたのである。以降、大正六年（一九一七年）、これまで日本の学界においては、とくにアメリカに焦点を据えた専門分野と研究者もいなかったが、アメリカがヨーロッパでの紛争に介入の準備を進

めていた時期を契機に、新渡戸は日本にもアメリカ研究を専門的に行う分野を構築する必要があることを主張した。これにいくつかの修正が加えられた後、東京帝国大学にアメリカ外交研究の講座を開設するよう提案、東京帝大法学校においてアメリカの歴史と憲法、そして外交の講座が開設されたのである。⁽¹⁾ 新渡戸は渡米以来、スタンフォード大学 (Stanford University) とシカゴ大学 (The University of Chicago) などを中心とし、⁽²⁾ その他の各地においても滞在中には多くの講義と講演を行う (The University of Brown/ Columbia/ Johns Hopkins/ Virginia/ Illinois/ Minnesota etc.)⁽³⁾ 日本の文化と事情を全米に紹介する⁽⁴⁾ことに務めた。明治四五年 (一九一二年) 彼は、"The Japanese Nation; its land, its people and its life: with special consideration to its relations with the United States, (New York: G. P. Putnam's Sons, 1912)"⁽⁵⁾ 「日本国民：その国土、民族、生活：とくに合衆国との関係を考慮して」を出版した。ここで彼は、自分自身の包括的な日本文化の紹介として、一九世紀の帝国主義と人種主義を取り上げ、全ての人類は精神において一つであるとの信念に立ち、東西の区別は便宜的かつ相対的であり、両者の総合の中にこそ未知の神秘が啓示されると主張した。そして日本が東西 (The East and the West) の会見場であることを強調し、相互理解を深め、共に人類の幸福のために前進することを勧めている。これに加えて、日本の民族と国民性 (Race and national characteristics) について触れているが、ここで彼は、日本語は言語上孤立しており、日本の文化的特徴としては独創的 (original) とし、⁽⁶⁾ よりは、模倣的 (mechanical) で感情的には敏感 (sensitive) であり、それゆえ芸術は得意であるが大思想はまだ貧困であると極めて客観的な論調で述べている。宗教的信念 (Religious beliefs) においては日本の宗教として神道と仏教、そしてキリスト教などについてあげているが、この中でもとくに神道の場合、民族の原始的本能の末であり、罪の觀念はほとんどなく、祖先崇拜を重んじていると紹介しつつ、こ

れには、特別な神学や経典、信条などもなく簡素であり、内省による暗示の宗教なので、そこからして理想も乏しく現実肯定となる自然主義の弱点を有し、権力とも結ばれやすい点について触れている。これに比べて、日本における仏教と儒教は、神道が充たしえなかった日本民族の精神的憧れを満たそうとしたと論じながら、神仏習合の経過を述べ、東西両宗教の一つの帰結点を模索して行くべきであることを論の前提とした。また日本独自の道徳と道徳理想 (morals and moral ideals) 並びに新教育制度の発展 (education and educational problems) ともその関連について触れながら、日本が今後の世界における平和に寄与して行くためにも、国家間の偏見などを排除して西欧と相互理解を深めていく必要があることを主張した。

新渡戸のアメリカでの日米交換教授としての講義は、当時の日本ではその存在自体が少しも認知されることなく終わった。しかし新渡戸のアメリカ行きが、アメリカの日本への認識と理解への端緒を与え、時代と共に広がりゆく太平洋の間の交流に貢献した、民間外交的な努力だったという側面は評価されるべきものである。アメリカの新聞が新渡戸のアメリカ講演について高く評価していたことも同じような理由に起因すると考えられる。

他方、第一回日米交換教授として新渡戸の残した業績は、その後、国際人として活躍してゆく新渡戸の公的生涯に一転機を開拓したものとなった。かつて、この時点から一〇年前にアメリカにおいて英文 *Pushido: The soul of Japan: A classic essay on Samurai ethics* を著わし、日本の精神と文化を世界に紹介し評価を受けた彼が、東洋を代表する思想家としての役割を果たして行くことになるのである。

4 新渡戸の「知行一致」と「平民道 (democracy)」についての考察

——内村鑑三の門下生としての矢内原忠雄らにおける新渡戸稲造

アメリカ民主政研究、及びリベラル思想に立脚した植民地政策論と日米関係研究分野では新渡戸稲造の継承者とも言われている経済学者の矢内原忠雄（一八九三—一九六一年）の場合、「先生が日本人に向って西洋思想を説くに際し、最も力説せられたるものは『人格』（パーソナリティ）の観念である。人格の観念は善き意味に於ける個人主義の基礎であって、『我も人なり』といふ自主独立の思想、竝に『彼も人なり』といふ他人の立場を尊重なきところに自由も自由主義も発達し得ず、と論ぜられたのである。：日本におけるデモクラシー発達の為には、人格観念に立脚する個人主義と、理性の立脚する科学的方法を学ぶことが必要であると為された。而して先生自身は此中特に人格概念の涵養に力を用ゐ、之によって日本人の思想的レベルを向上せしめんと努められたのである。これが先生の教育家としての事業であつた⁽⁸⁾」と証言している。これは、「知行一致」の知識人としての新渡戸の一面について、自らが、新渡戸が校長を務めていた第一高等学校での学生時代に前後して受けた印象を中心にして述べたものである。また、矢内原は「聖書に現れたる国際平和の思想」という論説の中で、「旧約及び新約聖書に於ける国際平和の思想に就いてお話ししようと思ふのでありますが、問題の別の立て方をすれば、『国民主義と国際主義』といふ形で提出を致してもよいのであります。新渡戸博士は愛国者でありました。真に日本の国を立派な国とするために生涯を献げた人でありまして、自覚的にも国を思ふた愛国の士でありました。同時に先生は国際主義者であつた。日本の国だけが国ではない。日本は世界の中にあつて始めて国を立てることが出来るのであり、又世界の国々の一つとして世界に貢献する

ところに、日本の国の存在の意義があると考へられまして、国際問題、国際平和を常に念頭に有つてをられたのであります⁽⁹⁾と新渡戸の平和思想について聖書と関連して述べた。また、矢内原と共に新渡戸の弟子であった高木八尺の場合も「新渡戸先生は、その講義と龐大なかさに達する書き物を通じ、長い年月に亙り、人格主義、国際主義と實際的な物の見方、ということをし、説いて已まなかつた。人は人間として個人として価のあるものでなくてはならぬ。そして又世界人として、国際的に通用する世界市民として起ち得るものとならなくてはいかぬ。—このようにくり返し訓えられた。それは先生の凡ての話、すべての書き物に溢れる思想であつた。そして先生ご自身が身を以て最も力強く範を示されたことであつた」と新渡戸の平和思想の根本となつてゐる人格主義と国際主義について評価してゐる。前述の矢内原忠雄は、早くから新渡戸が有してゐた市民尊重意識について「宗教を口にする事比較的少くしてその教の實踐を重んじたこと、平民の友であつた点など、リンコンと新渡戸博士との間に共通⁽¹¹⁾」するところがあると述べてゐる。新渡戸が力説してゐた「平民道」とは以下のような内容となつてゐる。

We have heard much of Bushido, or, as some would rather have it, of Shi-do——the precepts of knight-hood. It has been the foundation, the corner-stone, the pillar, of our national morality; but the times are changing, and the samurai are no more, though the precepts which moulded their character survive them still. These precepts must find a new application to changed circumstances; they must be democratized. The light which illumed the summit and the breast of society, must now enlighten its broader basis. Shi-do must be transformed into Min-do, the precepts of the people. With advancing education, bushi, fight-

ing nobels, will recede and heimin (ordinary—or let us rather translate it peaceful people) must come to the front.

武士道又は称して士道と伝ふもの、吾人既に多く之を開けり。之れぞ我國民道德の根底なり、礎石なり、柱となる。されど時代は推移し行きて、武士の品格を形成したる、其道猶ほ存して、武士已に在らず。斯道は変化せる事態に新たに適應せられずんばあらず。斯道は平民化せられずんばあらず。曾て社会の山嶺山胸を照せし日光は、今や其の広大なる山麓に遍からざるべからず。士道は影を変じて人民の道たる民道たる可し。戦を事とする貴族の武士は去りて、平和の民と称すべき彼平民は、陣頭に現はれ来らずんばあるべからず。⁽¹²⁾

第一高等学校在任中の新渡戸稲造は、本稿が扱った時代の直後になる明治四二年（一九〇八年）一月に、「実業之日本社」から要請を受けて、編集顧問となり、一般青年のために雑誌『実業の日本』に毎号平易な修養講話形式の文書を掲載することとなった。そして彼は同社が発行した『婦人世界』のほか、『婦女界』などにも婦人のための修養、煩悶に答える文書を掲載したのである。これらは極めて大きな反響があり、のちに単行本で『修養』『自警』『全集』第七卷所収）並びに『世渡りの道』、『一日一言』（『全集』第八卷所収）、『婦人に勧めて』、『一人の女』（『全集』第十一卷所収）などとして出版され、その中には、例えば『修養』のように明治の末（明治四四年）から大正時代を越えて昭和の初期までに出版し続けられたロングセラーも含まれている。彼は、矢内原によると「身を卑くして通俗の耳に入るよう、努めて平易に、日常卑近の生活の修養を説いた」のであり、「平民に向かって、平民の言葉を

以て、平民の道を説き「学校教育だけで満足しないで、社会教育に大きな興味と熱心とを示した」のも、彼の平民道から出されたものであった。⁽¹³⁾

さて、「平民道」という用語については様々な見方があるが、新渡戸自身がちに大正デモクラシーの時代、つまり彼自身が第一高等学校から東京帝国大学専任教授時代を経た時代、アメリカの多くの大学の講演会を行っていた間に「平民道」をデモクラシーの訳語として提案するようになった。大正八年（一九一九年）四月『実業之日本』を通じて紹介したこの「平民道」の中で彼は、階級社会の中の偏狭した過去の時代の道徳であった武士道を包括する国民全体の道徳様式として平民道がその代りになるべきであると主張した。もし、これが制度上の政治的意味を失うとしても、この道徳は多くの人々の人格尊重に基づいた生活と習慣の真髄であるところに意味を有すると共に、このような理由から「デモクラシーこそが平民道」であり、「平民道は武士道の延長⁽¹⁴⁾」であるということを主張した。新渡戸がデモクラシーを擁護し、称揚していたことは、「修養」に関する認識の外延 (extension) として理解することができると思われる。

また彼は、「僕が人力車に乗る毎に思ふことは、自分の腕には車を引くだけの力がない、自分の足には遠い道を歩む力がない、我を載せて引く車夫は腕と足の力に於いて僕に勝ること数段である。故に彼の出来る仕事は彼に為て貰ふ。その代り幸にして我懐にある金を以て彼の労に報ゆる。彼も亦之を望むのである。有無相通じ各自の長所を以て各自の短所を補ひ、乗る者と挽く者との間に敬意がない所でなく大いに調和が存してゐる。而して人格としては彼も人なり我も人なり、平等である」と述べつつ、「自由」と同様の意味として誤解されがちな「平等」の概念について新渡戸は、デモクラシーの根本的原理であることを認めながらも、人間は生来平等であるのではなく、「能力におけ

る平等」と「権利における平等」を厳格に区別する必要があると考えていた。同時に、新渡戸は、大正デモクラシーと呼ばれる新しい時代の流れには抵抗感を感じていた。彼はこの新しいイデオロギーには日本の国家そのものと矛盾するところがあり、実際、天皇および日本の国家の中心となっている国体の存在を揺るがすものであると考えていたのである。

我々が、新渡戸稲造を平和主義および民主主義の先駆者として評価する場合、留意すべき点は、彼の広大、かつ多様な思想的影響力であろう。彼の著作における普遍的な平和と平等、そして実践の思想は、教育における人格主義と国際主義の実践を形成し、のちに戦後の自由と平和、民主主義の時代において日本の文化と教育の面をより豊かなものに育成することに大きく寄与していたと考えられる。彼は、近代的西洋文化を日本に伝えるという啓蒙活動にとどまらず、逆に日本が西欧に伝えるべき文化的長所を生かし、文化的対話形式を創造しようとした。彼は、知識人、教育者としてこれを実現しようとし、多くの人たちに教育への参加を促し、福沢諭吉など他の日本の先駆的な近代知識人たちの業績を拡大継承するとともに、より明るい未来への志向点を提示したこともあったと思われる。

本稿では、新渡戸稲造の中庸的平和思想を中心に日露戦争という歴史的事件に反映させながら検討を行うと同時に、内村鑑三との比較的視座から平和思想についても検討を行った。近代期の知識人に共通するものは、近代的西欧文明および思想から受けた衝撃により、国際主義 (internationalism) と国民主義 (nationalism) を内面的に交錯させながら価値的形成を行った上に学問活動を広げた点にあると考えられる。新渡戸らは実践的平和主義を堅持しつつ、戦時的雰囲気さらされないよう一貫して冷静をもとめ、厳しい時代に備えることを力説したのである。彼は、この日露戦争の時代に限らず、その全生涯を通して論者としての立場の均衡を維持し、知識人としての理想と設定してい

た国際協調および平和を実現するために全力を尽くした。特に、新渡戸の理想に対する考えは、単なる理論で終わることを恐れ、それを政治的現実への積極的な適応と対処の姿勢で裏打ちし、内村のような知的鋭さと華々しさに加えられた理想より「知行一致」の色が強かったたであろう。これは、大きな矛盾と混沌を内包しながらも、普遍性を鑑みた思想的中庸と調和を志向したことの到達点だったと思われる。

- (1) 内田芳明編『内村燧三集』、東京、筑摩書房、一九七五年一月、二六二頁
- (2) 新渡戸稲造全集編集委員会（南原繁ほか）編『新渡戸稲造全集』（第二二巻）、東京、教文館、一九六九年九月、一六八頁
- (3) 著者訳
- (4) 宮本信之助「若き新渡戸稲造の信仰」（東京女子大学新渡戸稲造研究会編、『新渡戸稲造研究』）、東京、春秋社、一九六九年一〇月、二〇頁参照
- (5) 鳥居清治訳注『新渡戸稲造の手紙』、札幌、北海道大学図書刊行会、一九七六年一〇月、九二頁
- (6) 内村燧三（鈴木俊郎訳）「余は如何にして基督信者となりし乎」、東京、岩波書店、一九五八年二月、三一―三三頁
- (7) ジョージM・オーソロ『新渡戸稲造——国際主義の開拓者』、東京、中央大学出版部、一九九二年四月、一五九頁参照
- (8) 矢内原忠雄「新渡戸博士を憶ふ」、中央公論、東京、中央公論、一九三五年一月、一九六―一九七頁
- (9) 矢内原忠雄・高木八尺「聖書の平和思想とリンコン」、東京、岩波書店、一九四八年八月、二二頁参照
- (10) 高木八尺「民主主義の精神」、東京、東京大学出版会、一九六二年九月、九二頁参照
- (11) 矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』、東京、岩波書店、一九六五年二月、一六五頁参照
- (12) 新渡戸稲造全集編集委員会（南原繁ほか）編『新渡戸稲造全集』（第五巻）、東京、教文館、一九七〇年八月、二四―二五頁
- (13) 矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』（第二四巻）、東京、岩波書店、一九六五年一月、一四四頁
- (14) 新渡戸稲造全集編集委員会（南原繁ほか）編『新渡戸稲造全集』（第四巻）、東京、教文館、一九六九年十一月、五三八―五四〇頁参照